【259】

氏　名（本籍）	川上直秋（東京都）
学位の種類	博　士（心理学）
学位記番号	博甲第 5780 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**閾下単純接触が潜在認知に及ぼす効果** －刺激の多様性と接触の累積－

主　査	筑波大学教授	博士（心理学）	吉田富二雄
副　査	筑波大学教授	文学博士	松井　豊
副　査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯川進太郎
副　査	筑波大学准教授	博士（心理学）	加藤克紀

論文の内容の要旨

（目的）

“同じ対象の繰り返し接触が好意度増加をもたらす”という現象は単純接触効果と呼ばれる。特に、接触した刺激を再認できない事態においても好意度が増加するという、閾下単純接触効果の発見により、日常的な接触の大部分を占める、無意識的・無自覚的な接触による影響が明らかとされた。しかし、従来の枠組みには、接触した刺激と評定を行う刺激が同一であるという暗黙の前提の存在が窺われ、必ずしも現実場面で生じ得る現象とはなじまない。そこで本論文では、これまで刺激の物理的側面に焦点が当てられてきた単純接触効果を、カテゴリまで拡張することでこの問題の解決を試みた。同時に、単純接触効果を従来の自己報告による顕在的な測定だけでなく、近年開発と理論化の進む潜在指標を用いて測定を行い、反復接触が潜在認知に及ぼす効果を検討することを全体的目的とした。第 1 章から第 4 章において、これらの問題に関する理論的検討を行った。

（対象と方法）

大学生を対象に、8 つの実験的検討を行った。

（結果）

第 5 章（研究 1（N=60）・研究 2（N=63）・研究 3（N=60））と第 6 章（研究 4（N=39））では、単純接触効果をカテゴリまで拡張することを目的とした検討を行った。その結果、第 5 章では、単純接触効果は実際に接触した刺激に留まらずそのカテゴリにまで般化すること、第 6 章においては、閾下呈示による無意識的な過程として生起することなどが示された。さらに、これらの効果は IAT や GNAT という潜在指標において顕著に見られたことから、反復接触による好意度増加は、必ずしも本人の意識上にはのぼらない、潜在的効果として現れることが明らかとなった。以降の研究では、単純接触効果をカテゴリまで拡張したここまでの知見を踏まえ、効果に影響を及ぼす要因を検討した。第 7 章（研究 5（N=51）・研究 6（N=51））では、効果の強度に関わる要因として、“反復”と“変化”の観点から、カテゴリ内での多面的接触の効果を検討した。その結果、単に同じ対象のみに繰り返し接触するよりも、同一カテゴリ内での多様な刺激に接触する

方が、単純接触効果が強化されることが明らかとされた。

第８章（研究７－１（N=62）・研究７－２（N=64））では、効果の長期持続性に関わる要因として、接触の累積的効果を検討した。その結果、接触を日々積み重ねることによる累積的な接触は単純接触効果の長期持続性に、集中的な接触は単純接触効果の即効性に、そして多面的接触は単純接触効果の強度に、それぞれ影響を及ぼすことが明らかとされた。

（考察）

第９章では、実験的検討の結果を、単純接触効果のカテゴリへの拡張、接触における“反復”と“変化”、接触の累積的効果、単純接触と潜在認知の観点から整理した。その結果、単純接触効果は単に刺激の物理的特徴に依存した現象ではなく、カテゴリ（刺激のクラス）における、“反復”と“変化”、あるいは接触の積み重ねという形で、潜在認知へと影響を及ぼしていくことが明らかとされた。それと同時に、先行研究からみた本研究の位置づけを示す中で、単純接触効果のメカニズムや本研究の限界点あるいは今後の展開を示した。

審査の結果の要旨

従来の単純接触効果研究は、この現象が様々な接触刺激において生起することを確認してきたが、概ね現象の確認に止まり、その理論的または応用的な展開は十分とはいえない。本論文は、単純接触効果がカテゴリにおける“反復と変化”を伴って生起することを明らかにすることで、より広く、日常的な社会現象の解明へと繋がる有用な知見を提供するものといえる。特に、①閾下単純接触が潜在認知に強く影響すること、②接触における反復と変化が効果を強化すること、③接触の累積が効果を長期に渡り持続させることをIATやGNATの潜在的認知指標を用いて明確に示した点で、独創性の高いすぐれた研究といえる。これらの知見は単純接触効果への新たなアプローチの重要性を示すものであり、今後の研究へも重要な貢献をなすものと考えられる。今後は、現象生起のメカニズムやプロセスに関する検討も望まれるが、本研究で得られた知見は、単純接触研究のみならず潜在認知研究においても重要な示唆を含み、その意義は大きいといえよう。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。